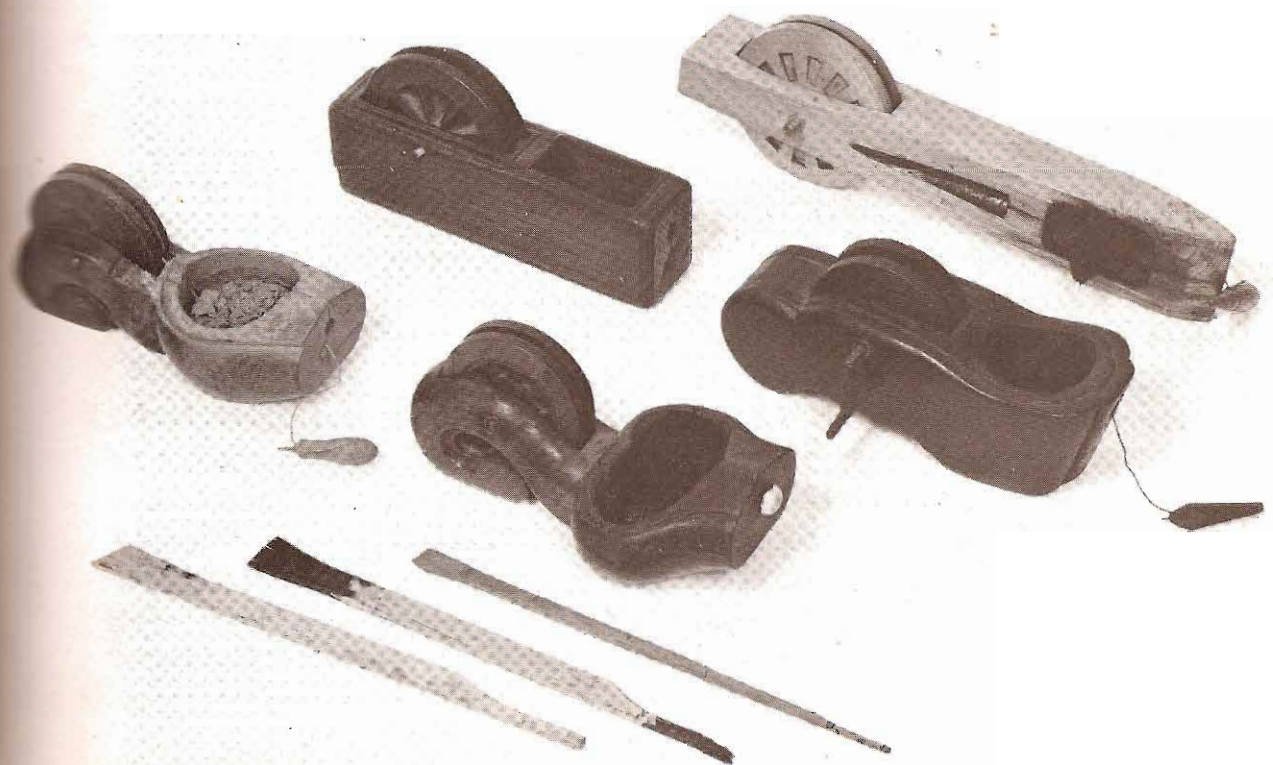


第3編

墨芯と墨壺

▼すみさし（黒芯・下）とすみつぼ（墨壺）。右端の墨壺はスプリングの力で墨糸を巻き込むように工夫してある。左端はしゅつぼ（朱壺）。



1 墨恣の用途

墨恣は第11図に示すように竹製で、一端は筒状、他の一端が棒状になっている。両端に墨汁をつけて、加工する材料に線や記号、あるいは文字を描くのに昔から使用されていた工具である。今日でも材料の仕口その他の準備作業を俗に「墨をする」というのは、この辺から出た言葉である。

2 墨恣の作り方

墨恣を作るには、竹を適当な寸法(幅4分・厚さ2分・長さ7.5寸)に切り取り、図のような形に作る。さらに墨汁の含みをよくするために、つぎのようにする。筒状の先端から柄の方向に向かって、約1寸まで縦に、よく切れる刀物を使って薄く割り込み、刷毛状にする。これは先端を軟らかくして、直線を描くのに便利にするためである。なお割り込みは4分の幅を4枚に、きわめて薄く割るが普通である。これにはそうとう熟練を必要とする。

棒状の一端の方は、台の上で左手でこれを回転させながら、先端を金槌で軽く注意しながらたたき潰して、軟らかな筆状にする。これに墨壺の墨汁を含ませて、文字や記号などを描くのに使う。

3 墨恣の使用法

第14章 墨 壺

1 墨壺の用途と構造

墨壺は第11図に示すような形のもので、墨汁を蓄えるための墨壺、墨糸(墨糸)、糸巻車(車形)、廻転柄(乙字形把手)、軽子(小錘)、糸口(陶器製)などの各部分からできている。

墨壺は前述した墨恣と併用して各種の線や記号を描くほか、木材その他の材料の表面に、墨糸を利用して必要な長さに正確な直線を非常に簡単に描くことができる。図のように糸の弾力性を利用して、墨糸に含まれた墨汁を材料の面につける原理になっている。これは一見きわめて幼稚な操作のように見えるが、材料の表面の凹凸起伏の多少にかかわらず、幾何学的正確さで、必要な方向に直線を描くことが

墨恣は、鉛筆や烏口、あるいは白書と同じような

目的に使用する。筒状の部分は烏口などと同じように、定規に沿って所定の位置に細い正確な直線を描くのに使う。使用方法も烏口と同様に、筒の太さは、規と平行に引くことが大切である。線の太さは、筒状の先端の削り加減で太くも細くもできる。

棒状の方は、前に説明したように毛の固い毛筆状になっているから、面の粗い材料などに文字や少しい記号を描くのに、たいへん便利である。

昔からわが国の工匠は、この墨恣と墨壺や指金を使って、巧みに大建築物の設計をしたり、矩計図や盛り付け、あるいは現寸のひな型などを描いている。

4 墨恣の起源

墨恣は、昔は恣の文字が使われ、和名では須美佐古い文献によれば「筒を以て筆となし、恣と云ふ。周の殷王の時、更臣公檀と云ふ人これを作り文字を書き、これ今の工匠の使用する墨恣の始めなり」とあるから、中国から渡来したものと想像される。おそらくその起源は、今から2,000年以上も前のさかのぼるものである。

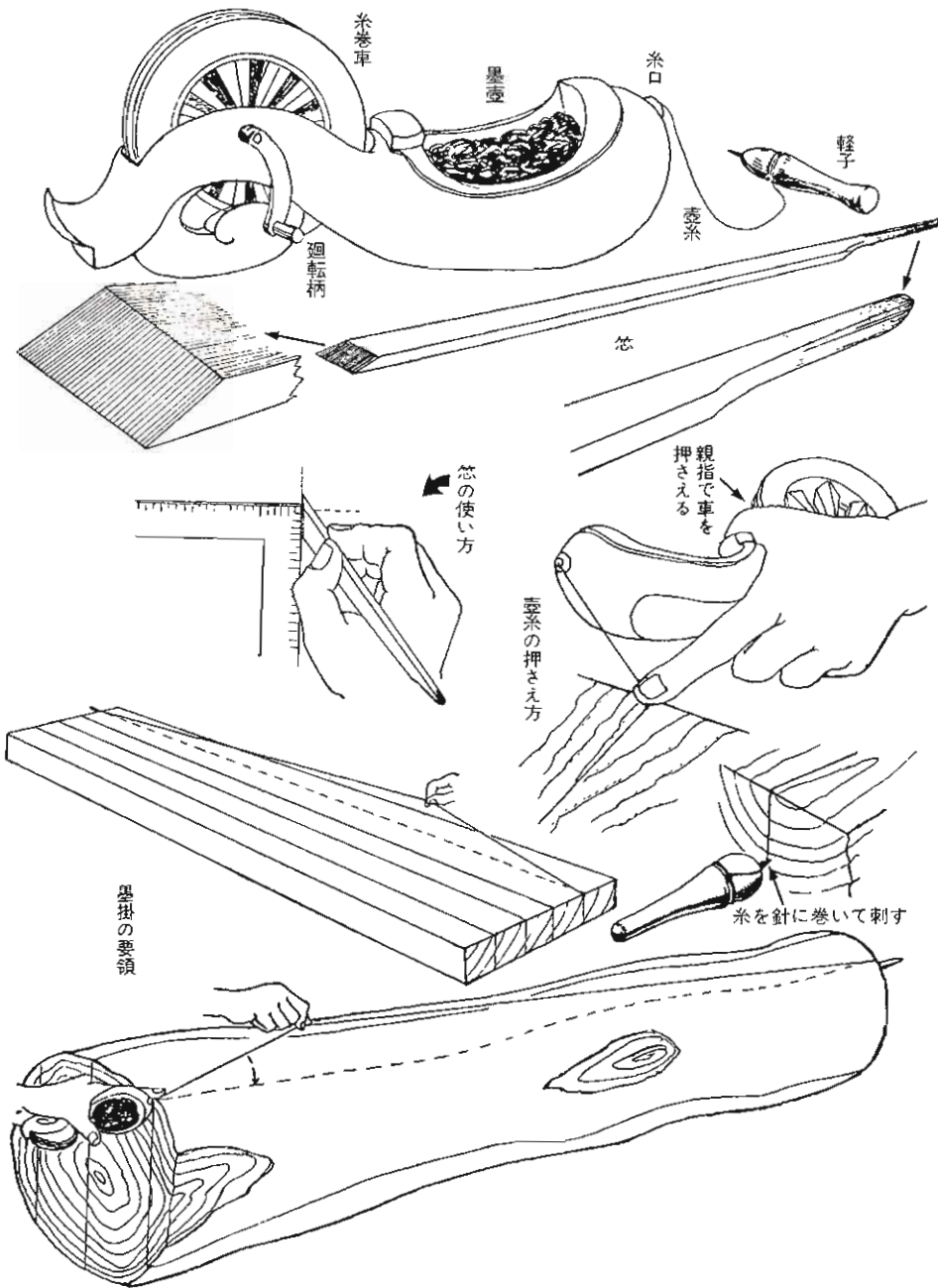
できる。この点からみれば、これに代る便利な器具

はほかにないもので、木工をはじめ板金工・石工、その他各方面に広く使われている。とくに建築業者(大工職)にとつては、古くから壺矩といつて、矩尺とともになくてはならない重要なものであった。

2 墨壺の種類と材料

墨壺の種類には、丸形・角形・石屏形・白糸巻などがある。それぞれ用途によって形が違い、大きさに大・中・小の区別がある。墨汁を使うものを墨壺、赤色を使うものを朱壺という。朱壺は顔料として朱か紅粉を使う。木工用として朱壺を使用するのは、暗黒色の材料、たとえば黒檀や黒柿のような材料を取り扱うときである。この場合墨汁では不便なので

第11図 墨壺



朱線を使う。また特殊な材料には朱の代用に^{しろこ}白粉を
 塗って、一層明瞭にさせることもある。

小細工用には小形の墨壺が適当であり、普通の仕
 事には中形のものが多く使われる。また大形のもの

は、大工職、木挽職などに多く使われる。このほか
 特殊なものとして、儀式用に特別大形に作られ、漆
 塗にし金銀の^{しほり}蒔絵をほどこしたり、あるいは華麗な
 彫刻などをした装飾本位のものもある。

墨壺の材料には、ふつうは礬ワカを使用し、上等なものには桑や槐スズナなどを使う。商品として専門家の製作したのもあるが、各自の好みと工夫を入れて自分で作ってみるのも、趣味として奥ゆかしく好ましいものである。

3 墨壺の使用法

墨壺は第11図に示すように、墨壺の部分に真綿を入れ、これに墨汁を浸して蓄える。この中に、糸巻車(車形)の溝の中に巻かれた糸の先を通し、陶製の糸口を通し外に出す。これを軽子の柄に結ぶ。糸口を陶製にするのは、壺糸の滑りをよくするためである。

墨壺の使い方は、まず左手で墨壺を持ち、右手の指先で軽子の柄をつかむ。それから壺糸の先を針の位置と同じにするために、壺糸を軽子の針の根本に1回巻きつけて、必要な位置に正しく立て、壺糸の一端を固定する。つきに墨壺の先で、墨壺の中で軽く壺糸を押さえ墨汁の浸透をよくしながら糸を繰り出す。必要な長さだけ後退して糸の出か適当な長さになったら、左手の親指で糸巻車の小端こはしらを押さえ、車の回転を止めて糸を止める。そのまま左手の人差し指を使って、壺糸を必要な位置に当てて押さえながら糸を十分に緊張させ、右手の指先で壺糸をまっすぐ上につまみ上げて放す。こうすれば糸の弾力で、材料に起伏があっても、壺糸は正確な直線を材料の表面につけることができる。糸をつまみ

槐(P32)……ワカ科の落葉喬木で中国原産

2掛(P32)……2巻き

米花(P32)……チガヤのごとく、イネ科の多年草

上げる場合、手の位置によって異なる墨線が直線になつていないことがあるから、平面に対して正しく垂直に糸をつまみ上げることが大切である。作業が繁ければ、糸巻車の把手を右手で回転させ、糸を糸巻車に巻き込む。

4 墨壺取扱い上の注意

壺糸(墨糸)は細い絹糸でできた丈夫なもので、節や結節のある糸は避ける。用途によって糸の太さに多少の違いがある。市販されている墨糸の長さは、普通2掛で1束とされ、1掛の長さは約8m位ある。墨汁を吸収させるために墨壺の中に入れるものと

しては、普通の真綿・脱脂綿・苧・パシヤ・粟花の穂などか使用されるが、真綿まわたもつともよいようにある。真綿は、そのまま使うと墨汁を弾いて吸収しなから、使用する前に温湯に浸し、十分に温つたものを入れて墨汁を含ませる。真綿以外の材料を使う場合には、上を薄い絹の布片でおおってから使用するほうがよい。

5 墨壺の起源

墨壺は、昔は羅漢・墨汁・須美豆保などと呼ばれていた。起源は明らかではないが、古文獻に名称が出てくるのを見ると、前述の墨壺と同じように、中国で古代から用いられ、それがわが国に輸入され、今日にいたつたものであろう。